現場レポート

“農と食” 北の大地から

連載第12回

新規就農を応援する 北空知の挑戦

「産・学・官」三位一体で受け皿 2年間かけて技術と理論を磨く

4人の一期生の多くが入学を希望するきっかけになった「新規就農フォーラム」（3月9日、札幌市内で）。左下の写真は「新規就農コース」を新設した拓殖短大の校舎

ルポライター
滝川 康治

空知管内の自治体や大学、農業団体が連携して北海道農業の新しい担い手を確保しよう――と昨秋、深川市内に「新規就農サポートセンター」が発足した。地元の拓殖短大に「新規就農コース」が新設され、この春には一期生の4人が入学して研修ファームでの実習に汗を流している。国内では初めての独創的な取りくみと就農を志す人たちの横顔をリポートする。

全国に先駆けて「就農コース」新設

「新たな人生・一つの選択肢・新規就農」をテーマにしたフォーラムが今年三月、札幌市内で開かれた。新規就農者がみずからの体験を語り、実習を始めた翌朝に仕事がきつくて姿を消した研修生のエピソードを披露しながら、恵庭市内の農業法人代表が農業の現状を説き、行政や農協の担当者が就農支援の取りくみを紹介する――。そんな話がつづく会場には新規就農をめざす若者の姿もあり、パネリストに対する熱心な質問が寄せられた。

フォーラムを主催したのは、空知管内の自治体と農協、大学が連携し、三位一体で就農希望者を応援する新規就農サポートセンター（理事長・黄倉良一JAきたそらち組合長）と拓殖大学北海道短大（草原克豪学長）。〇三年度から同短大の環境農学科に新設された「新規就農コース」のPRと学生獲得にむけた初めての企画だった。

全国に先駆けて設置された「新規就農コース」は、一種の社会人学生制度である。二年間にわたって夏場（4～10月）は研修ファームでの実習、冬場（11～3月）には大学で農業経営や技術などを学んで就農に備える。そして卒業後は、同サポートセンターが農地や農家を紹介し、新規就農を支援する――というシステムだ（詳細は後述）。

北海道の基幹産業の農業は、離農戸数が増加し、後継者不足による農家の高齢化がすすむなど、どこの地域も担い手不足に悩んでいる。その一方で、農的暮らしに関心が高まり、長引く不況下での新たな職業として新規就農をめざす人は増える傾向にある。

札幌の㈱北海道農業担い手育成センターによると、「昭和三十年代から平成初期にかけて、道内の新規就農者は年間に二桁と少なかったが、いまは一種の農村回帰現象が見られる」（吉田孝之相談課長）といい、ここ五年ほどは年間二千件前後の相談件数（体験実習の相談を含む）がある。実際に新規就農した人も、二〇〇二年度には六百九十七人（新規学卒者とUターン就農を含む。道農業改良課調べ）に上る。

が、志はあっても実際の就農には多くのハードルが待ちかまえる。就農希望の多い酪農を典型に多額の資金が必要だし、希望に沿った農地が取得できるとも限らない。うまく就農できても、経営がなかなか軌道に乗らなかったり、人間関係が濃密な田舎にうまく溶け込めない…といった話もよく聞く。

そうした課題を解決するために考え出されたのが、物心両面で就農を応援するサポートセンターという受け皿だ。初年度の今年は、道内各地から二十代から四十代までの男女四人が「新規就農コース」に入学した。

自転車の旅で農業に開眼して入学へ

道央自動車道にほど近い深川市音江の農村地帯。ここで野菜の苗やキュウリ、水稲などを作っている脇本健治さん（1935年生まれ）の農場で実習に汗を流すのは、函館出身の横澤明さん（78年生まれ）である。

父親は水道技術者、母親は看護婦という家庭に育った横澤さんは、札幌の北星学園大を卒業すると自転車の旅に出る。本州をへて、菊とタバコを作っている沖縄の農家で七カ月アルバイトをやり、「農業をやってみたいな」と漠然と思った。帰り道、無農薬でリンゴ栽培をしている青森の農家でも半月ほど働く。その日暮らしの旅は一年七カ月におよんだが、農作業は肌に合っている、と実感できた。

昨年、北海道に帰ってくると、学生時代の友人たちは就職しており、後ろ

めたさを感じる。この三月、知己の農業法人の経営者に「農業をやりたいんだけど…」と相談すると、サポートセンター構想の仕掛け人で拓殖短大環境農学科長の相馬暁さん（元道立北海道農業試験場長）に会わせてくれた。支援態勢が充実していると思い、迷わず入学を申し込んだ。「やりたい農業は？」との質問に「野菜」と答えると、脇本さんを紹介された、という。

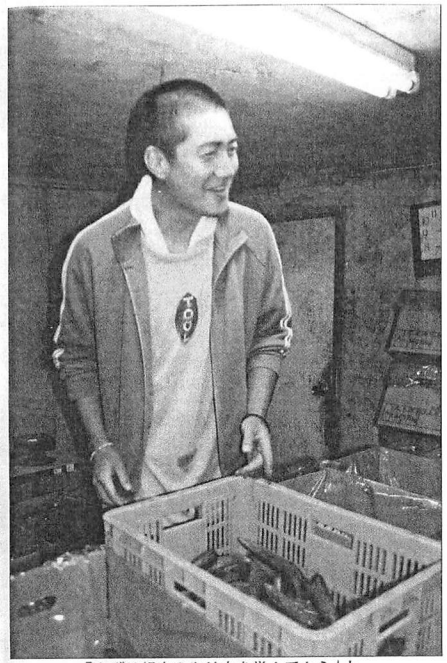
わたしが取材に訪れた六月下旬、横澤さんはハウス栽培したキュウリの選別・出荷作業の真っ最中だった。

「まずは親方（脇本さん）のやり方を学んで、覚えてからですね。応用が効くように基礎をきちんと身につけて、一人前に野菜を作れるようになってから自分なりの道を開拓したい」

と、しっかりした口調の好青年だ。空いている教員住宅で生活し、朝八時前にはここに到着し、夕方五～六時ころまで働く（休日は週1回）。春には野菜苗の出荷作業を任せてもらい、市内の店舗に配達して回ったこともある。

脇本さんの息子たちは別の仕事に就いており、横澤さんのことを「お前はうちの三男坊だ」と家族同然の付き合い。「一軒の農家で作業の流れを見たほうがいい」と考える横澤さんは、二年間ともここでの研修を希望している。

「明君はまじめで、ようやりますよ。仕事の飲み込みが早く、真剣にやっている。自分で農業をやりたい、という意思が強いようですね」



「まずは親方のやり方を学んでから」と
キュウリを選別する横澤明さん

と働きぶりを高く評価する脇本さんは、以前から新規就農に関心が強い。

「農協の意向調査を通じて、深川の農家数はこれから十年で三分の一になると思っていました。『農地を守るために若い血を入れていかなければ…』と言う短大の学長と、わたしも同じ意見でね。こうした人たちが増えると支援の仕組みも整ってくるんじゃないか」

と支援システムの充実に期待する。

夫の帰郷きっかけに野菜づくり学ぶ

四人のなかで就農後のことが決まっているのは、夫の実家（稲作農家）がある深川市内に移り住んだ村上はるみさん（67年美瑛町生まれ）である。車で十分ほどの自宅から同市音江の桑野作栄さん（32年生まれ）の農場に通い、野菜栽培などを学んでいる。

実家は小麦やジャガイモなどの畑作農家。北大農学部農業工学科を卒業したものの、実際に大学で作物を育てたり、経営を学んだわけではない。卒業後は、カルビーに就職してジャガイモの受け入れを担当し、冬は在庫管理、夏は圃場訪問という生活。仕事で農家と接する機会はあり、「いつか自分で農業をやってみたい」という気持ちはずっといだいていた。

夫の誠さん（65年生まれ）との結婚を機に退職し、その後は札幌市内で暮らしていた。が、夫は脱サラして実家に戻って家業に就く決意を固め、昨秋、一緒に帰郷した。ちょうどそのころ、センター設立の記事を目にする。

「実家で仕事を手伝うだけよりも、大学で実習と営農計画を学んでおくと、今後のためにも役に立つのでは…」

と考えた村上さんは、さっそく情報を収集し、家族の了解も取り付ける。子どもはおらず、夫の両親も若く、就学の条件には恵まれていた。

「自宅から通えて、水田があり、野菜を作っている農家」を研修先に希望して、桑野さん宅での実習が決まった。

「桑野さんは、以前からブロッコリーなど新しい作物に挑戦してきた方で、『ここならいいな』と思って希望しました。実際に働いてみて満足しています。トマトひとつとっても（品種ごとの）味の特徴や育て方をよく知っているし、苗を買いに来るお客さんと話すと野菜全般に詳しくなれる」

と快活に話す村上さんは、帰宅すると野菜づくりや作業のようすなどを話題にすることも多いらしい。「実家ではなかなか教われない、営農計画や作業の組み立て方を勉強するのを楽しみにしています」と声を弾ませていた。

「営農計画などを勉強するのが楽しみ」と話す村上はるみさん

建設業から転身し養鶏などをめざす

最年長の菅原克弘さん（59年夕張市生まれ）は、建設会社社員からの転身組である。

子どものころからモノづくりが好きで、高校卒業後はずっと建築関係の仕事に携わってきた。が、十年ほど前から、資源の循環がうまくいかず廃棄されているものが多い実態に疑問をいだき、「贅肉をはぶいた生き方はできないか」と考えるようになる。

農業に対する関心が少しずつ強まり、数年前には講演会に参加したり、道農業担い手育成センターを訪ねるようになった。農家実習を申し込んだ経験もあるが、先方との条件が折り合わず、「新規就農は憧れであって無理ではないか」と感じていたそうだ。

そんななか冒頭のフォーラムに参加して「就農コース」の話を知り、「いままでの経緯もあるのでダメかもしれない、とも思ったけれど、親切なサポートに励まされた面もあって入学を希望しました」（菅原さん）。わたしが訪れたときは、深川市内で平飼い養鶏などをやっている農場で研修したあと、大学の農場でトラクター操作や畑作実習の準備などに励んでいた。

「できれば北空知管内で、養鶏を主体に有機野菜も作ってみたい。自分で鶏の飼料を配合して与え、卵は消費者に直販する――それには『いかに売るか』が決め手になるでしょう。消費者さえ確保できれば、ここでの二年間の研修期間が終わるのを待ちわびながら過ごせるんじゃないか」（菅原さん）

と、長いあいだ逡巡しながら得た目標にむけて決意は揺るがない。

今回は取材できなかったが、北広島市出身の大友淳さん（72年生まれ）は沼田町内の農業生産法人で稲作や園芸などの研修をつづけている。村上さんを除く三人は独身で、冒頭のフォーラムがきっかけで入学した人たちだ。

四者が連携しつつ「農家の卵」育てる

ここで、就農支援システムについて大まかに紹介しておこう。

国内初の「農家研修プラス大学での理論学習」という独創的な支援システムは、次の四者が担っている。

①新規就農サポートセンター＝空知管内の自治体と関係機関、企業などによって昨年秋に設立された任意団体で、各機関とのパイプ役を果たす。

②拓殖短大＝学生募集や農家研修などの委託、冬期学習、卒業生のアフターケアなどを行なう。

③研修ファーム＝短大からの農家研修の受託（実習生一人当たり二十万円／月）など。全道で約六十カ所が登録済み。

④ブランチ＝各市町村の行政・農業委員会・農協で組織する就農地への斡旋・紹介などをする地域サポートセンター。現在は北空知のみの設置。

この四者は共同で入学の合否判定を行なっている。研修ファームは「新規就農コース」の学生に対して、受託研

「養鶏を主体に有機野菜も作りたい」と
意欲をのぞかせる菅原克弘さん

修費のなかから月七万円の賃金を支払い、学生は卒業までに就農後五年間の営農計画を立てる。また、北空知管内への就農希望者に限っては、深川市が授業料のほぼ全額を助成する――こうして、農業未経験の人たちを「農家の卵」として育てるわけだ。かつて北の大地に入植し、苦労して開墾作業にあたった先人たちの境遇とは隔世の感があり、わたしの目には至れり尽くせりの支援システムに映る。

こうした新規就農者を育てる構想は、九二年に同短大が現在地に移転したころに原案があったものの、稲作地帯なので就農先の確保が難しいなどの理由で実現できなかった。やがて転機が訪れる。農業を取り巻く環境が大きく変わり、同短大では二〇〇〇年度、「土や作物と対話できる人材を育てます」をキャッチコピーに環境農学科（定員80人）を創設し、道の「クリーン農業」提唱者の相馬暁さんを初代学科長に迎えた。その相馬さんが言い出しっぺとなり、「新規就農コース」を新設することになった。

「技術体系や就農のノウハウを蓄積したい」と話す拓殖短大の橋本信教授

「環境農学科の卒業生の半数は農業後継者になるが、学生数は減少傾向にあり、学生募集の面でも新たな担い手が必要でした。新規就農コースにはモデルがないうえに、大学と研修ファーム・農協・行政・サポートセンターとの連携が重要なので、新たなシステムを考え出すのが大変だった。相手の学生はどこにいるか分からないけれど、年を追って就農希望者が増えているなかで、いちばん難しい作業をやった」

開設作業に奔走した同科教授の橋本信さん（グリーンツーリズム論など担当。49年生まれ）は、こう振り返り、「学生募集にはフォーラムがいちばん相応しいシステム」と実感を込めて語る。そのフォーラム、本年度は七月と九月に東京で開催して本州方面からの入学者を募る一方、道内では札幌や旭川、帯広で計画している。

フォーラムで手応え 道内外から20人募集

一期生は四人、ひとまず一歩を踏みだした取りくみは来年度、二十人の学生募集が目標という。

「いまは親の経営をそのまま継承する時代ではないので、このうち何人かは農家の後継者やUターン就農者を入れたい。また、百万人のふるさと回帰・循環運動（立松和平理事長）など道外の民間団体とも連携し、北海道の受け皿として位置づけてもらう」（サポートセンターの山本毅事務局次長）

という計画もあり、八月上旬には研修ファームなどを訪問する道内ツアーも実施する。

拓殖短大の橋本教授は、

「この試みは拓大だけの独占物とは考えず、北海道全体で新規就農者を養成する先導的な役割を果たしたい。それは大学とって、多様な栽培技術体系や一人ひとりの就農希望者にきめ細かく対応するノウハウを蓄積することになる。二年研修し、三年営農して分かる――短期間の動きに一喜一憂するのでなく、これは長い時間をかけて成果を上げていく試みなんですよ」

と力を込めた。農協側の取りくみについては、別項の大倉理事長の話を読んでいただきたい。

就農時の具体的な支援を行なう「地域ブランチ」をどう全道に広げていくのか――など多くの課題をかかえながら、始まったばかりの北空知の挑戦。五年先、十年先に個性的で経営センスが光る農民が誕生する日が楽しみだ。

ちらし宅配
一戸建・アパート・マンション
札幌市内ご希望地区
へ宅配します。
MID
株式会社ミッド北海道
札幌市白石区南郷通19丁目北2番1号
☎(011)863-6666

Interview

「食はいのち」継承する人を育てたい

新規就農サポートセンター理事長　黄倉 良二さん

若い世代を農村に

いま、農業者が急速に高齢化し、意欲のある若い世代が農村にそろっていません。食を外国に依存し、食糧確保のための水ひとつとっても、日本は途上国の十五億人分に匹敵する水を使っています。日本人の食べ方を変えなければいけないのに、農業を取り巻く条件や就農者、販売農家数などは五年前と何も変わっていません。このまま農業を衰退させないためには、若い担い手の存在が大事だと思います。今後、新たな農業政策が構築されても、新規就農者は具備されないからです。

BSE（狂牛病）の発生以降、「食べものとは何か？」が問われています。それ（食べもの）はモノじゃなく、いのち（生命）なんです。いのちには、山と木と緑が健全で、水が豊かであることが必要です。農業者は、与えられた土を基本に作り、それを継承する。

これまで大型化や効率化を優先して、百姓の魂はすたれてきました。「安心・安全」や生産履歴が叫ばれていますが、わたしは「信頼」を大事にしたい。それには若い人がいないと農業は持続できません。

今年四月、JAきたそらち総代会では「食べものはいのち」「いのち・食糧・環境・暮らしを守り育む」を農協の役割として取りくむことを決めました。そこに還るべきです。

わたしが暮らす北竜町では、この八年間で六人が新規就農して、待機者も二人います。

人対策を担当する専属職員を一人おきました。来年、二十人の学生が集まったら、もう一人増やす予定です。きめ細かくフォーラムをやったり、（環境農学科長の）相馬先生の幅広い人脈を生かして掘り起こしながら、学生を確保する努力をしていきたい。

受け入れ先を全道に広げて、各地区で行政と農協・農業委員会が一体となったブランチ活動を推進していくことも大きな課題です。行政と農協が一体でないと動きません。研修先の農場だけではできない、住宅や就学資金などの組み立てを考えることが大事です。

現在の研修先は、すでに多くの人を受け入れてきた人ばかりです。これからは、営々と農業をやり、近い将来リタイアする人たちの存在も大きいので、そうした層を掘り起こしていきたい。五年、十年先には、地域で自立し、自分のめざす農業をできる担い手に育つといいですね。別の感覚をもった新規就農者が地域の人と融合できると、大きな役割を果たせるでしょう。地域のなかで、彼らをしなやかに受け入れられるようにしたいものです。

おおくら・りょうじ　一九三九年空知管内北竜町生まれ。中一のときに就農し、三十年前から化学肥料や農薬を使わない自然農法に取りくむ。現在は、息子夫婦との二世代で経営し、メロンやユキヒカリなどを作る。北竜町農協組合長（91年～2000年）などをへて、昨年六月からJAきたそらち組合長